

## 磐城炭礦大悲惨事に就き

# 常磐の諸彦に告ぐ!!!

◆…我が日本鑛夫組合常磐地方聯合會は去る三月二十七日磐城炭礦町田堅坑に於いて突發した悲惨な坑内火事による犠牲者百三十四名の尊靈に對して、何よりも先づ深厚なる哀悼の意を表するものである。

◆…災害の悲報一度飛ぶや、我が聯合會は直ちに全支部を總動員し、組織の力によつて、微力乍らも死屍引上げの難作業に對して全努力を擧げて活動したのである。此の獻身的活動たるや、坑口に群つて泣く遺族の悲痛な心事の爲めに一刻も速かに、その父の、その母の、その夫の、その兄妹の哀れな死屍を引上げんとする微意に過ぎぬ。故に我等の行動たるや、何等求むる處あつてなすものでなし、爲めにする處あつてなすものでもないこと當然の理である。従つて、今日、引上作業が略完了したのを見て、我等はこゝに一週日に亘つた救護隊を解くものである。

◆…今回の大災害の原因等は未だ確定的に判明せぬが、我等鑛山労働者自身、之れを考察すれば、その原因の大なるものは、坑内設備の不完全にあつたとは論を俟たない。又一坑内火事によつて、かくも百三十四の生命を奪つたことは、鐵火と共に非常汽笛を鳴らさなかつたこと、堅坑密閉が早過ぎたこと、救助ベルが坑内から鳴らされたに係らず、ケ―プを引上げなかつたこと等―凡て會社當局の手落ちにあつたこと亦争ひなき處である。

◆…抑々一國文明の基礎たる産業に、その活動の燃料を供するものは、この炭礦業である。従つて、地下三千尺の暗黒の坑底に一点の安全燈、一介の鶴嘴を手頼りに、炭を掘る我が鑛山労働者こそ、現代文明の尊ぶべき母と云はねばならぬ。然るに、この坑内労働たるや、或は落盤に、或は瓦斯爆發に、或は坑内火災に―實に大なる危険を伴ふものである。故にこの尊く、然も危険なる労働に従ふ鑛山労働者に對しては、坑内設備の十二分な完備を計つて、些かでも如上の變災を避くる方法を講せねばならぬこと、今我等の喋々を俟たずとも自明の理である。

◆…然るに今回、會社が、坑内設備の粗漏と、人命よりも營利を重じた資本家的行爲とは、遂に、この大痛事を惹起せしめたことは、深く遺憾とせざるを得ない。されど、己に慘事の起つた今日に於いては、會社としてその罪を贖ふ爲めにも、父を失ひ、夫を失ひ、子を失つた、氣の毒な遺族のために―よし物質を以つて生命を返へすことは不可能であるとも―充分な慰藉を講せんことを切望するものである。

又、今後、かゝる悲惨を再び重ねざらんがため、この變災を機として、現在不完全極まる坑内設備の完成を必ず計らんことを併せて希望するものである。

◆…然るに巷間の流言に、鑛夫組合がこの際何等かの行動に出づるかに傳ふるものがある。我等は徒らに事を好んで争ひを起すものではない。我等は此の際、會社當局が徹底的に誠意を披瀝して、哀れな遺族を慰安すると共に、今後の方針に於いて幸ひに誤りなからんことを深く願ふものである。此の爲めに、我等は災害調査委員會を組織し、之れによつて今回の事變を一町田の事件としてよりは、弘く社會的事件として、會社の態度に對して嚴重なる監視の眼を怠るものではない。

◆…以上、尊くも哀れな犠牲者と遺族とに對して深く追悼の意を捧ぐると共に、些か、我が日本鑛夫組合常磐地方聯合會の異意を述べらるるものである。

昭和二年四月三日

日本鑛夫組合常磐地方聯合會

災害調査委員會